

日本における膀胱がんの性差

松田 智大* 丸亀 知美 味木 和喜子 祖父江 友孝

1. 背景

膀胱がんは泌尿器系の一般的な悪性腫瘍であり、特に日本の男性では、部位別に見た膀胱がんの罹患率は8番目となっている。膀胱は、男女において、そのがん罹患・死亡率および生存率の差異が比較的大きい部位として知られている。本研究の目的は、全国がん罹患モニタリング集計(MCIJ)のがん罹患データに基づき、年齢、がんの拡がり、腫瘍の詳細部位や組織型、地理的な分布を考慮しつつ、膀胱がんの罹患・死亡、生存率における性差を観察することにある。

2. 方法

MCIJ2004として、31の地域がん登録から提供頂いた1993-2004年のがん罹患データより、ICD-10コード(C67)に該当する腫瘍を抽出した。品質管理の結果、最終的に17地域のデータセット(男性38,300人、女性12,183人)を分析に利用した。死亡データは厚生労働省の人口動態統計より得た。

3. 結果

罹患データの精度基準を算出したところDCO%は、男性12.5%、女性20.8%で、MV%は男性82.4%、女性73.3%であった。女性は、診断時に進行していた腫瘍の割合が高く、臨床進行度は、限局割合：男性89.5%、女性57.3%、所属リンパ節転移または隣接臓器浸

潤割合：男性4.8%、女性37.3%、遠隔転移割合：男性6.1%、女性4.5%であった。この違いは、年齢階級別に観察しても明らかであった。組織型では、男性において尿路上皮がんは、女性よりも多く観察されており、96.0%：92.8%であった。言い換えれば、女性においては、扁平上皮がん、腺がんおよび肉腫が男性より多く観察された。女性の膀胱がん患者は、男性患者より予後が悪く、5年相対生存率は、男女間でおおよそ10ポイントの差があった。時系列では、観察期間中、罹患率および死亡率、それら率の男女比は、ほぼ一定で推移しており、罹患率における男女比は4-5、死亡率では約3.5であった。

4. 考察

膀胱がんには、大きな男女差が観測された。診断時の臨床進行度の性差によって、ある程度は、死亡率や生存率の差異を説明できると考えられる。しかしながら、発症のメカニズムの違い、治療方法の差、社会的性別要因、あるいは、性別特有のデータ品質の違いについても考慮されなくてはならない。このような理由から、膀胱がんの対策は、性別に応じて検討されるべきだと考える。

*国立がん研究センターがん対策情報センターがん情報・統計部
〒104-0045 中央区築地5-1-1
